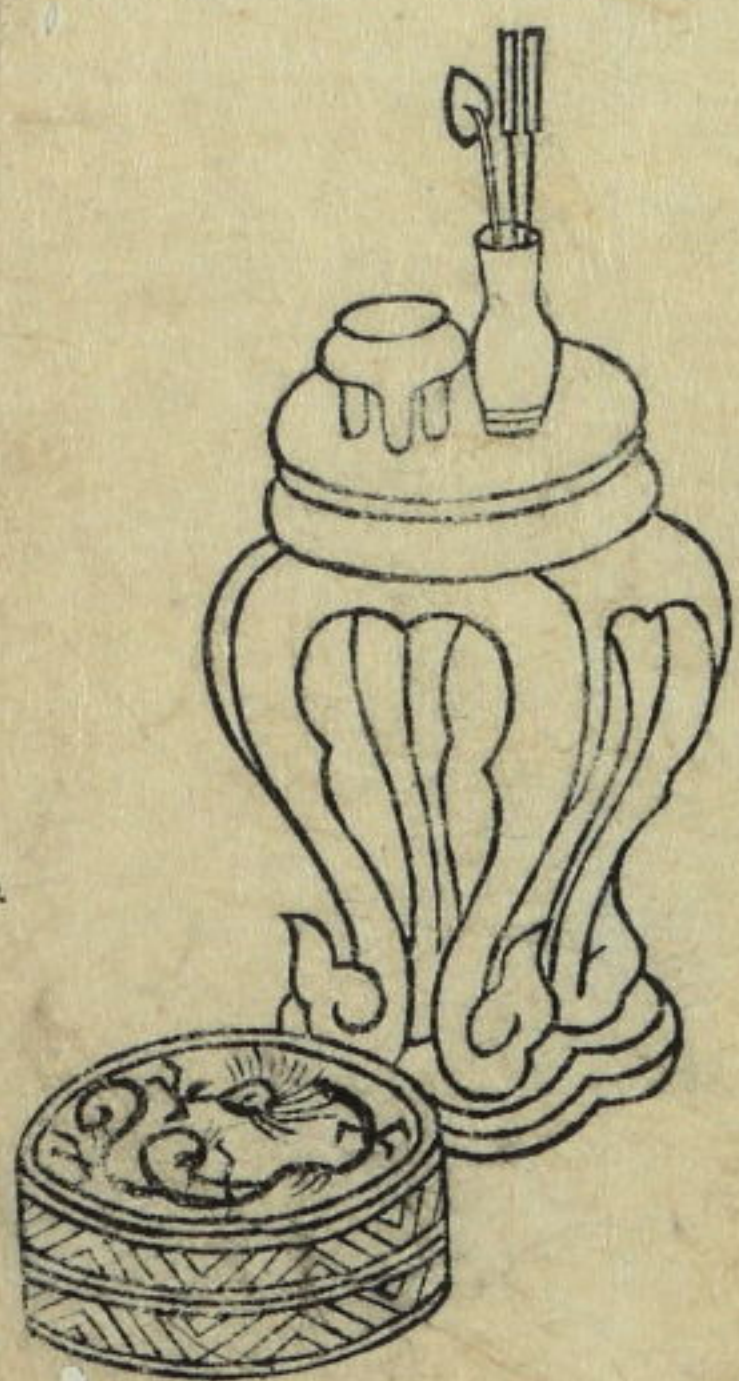
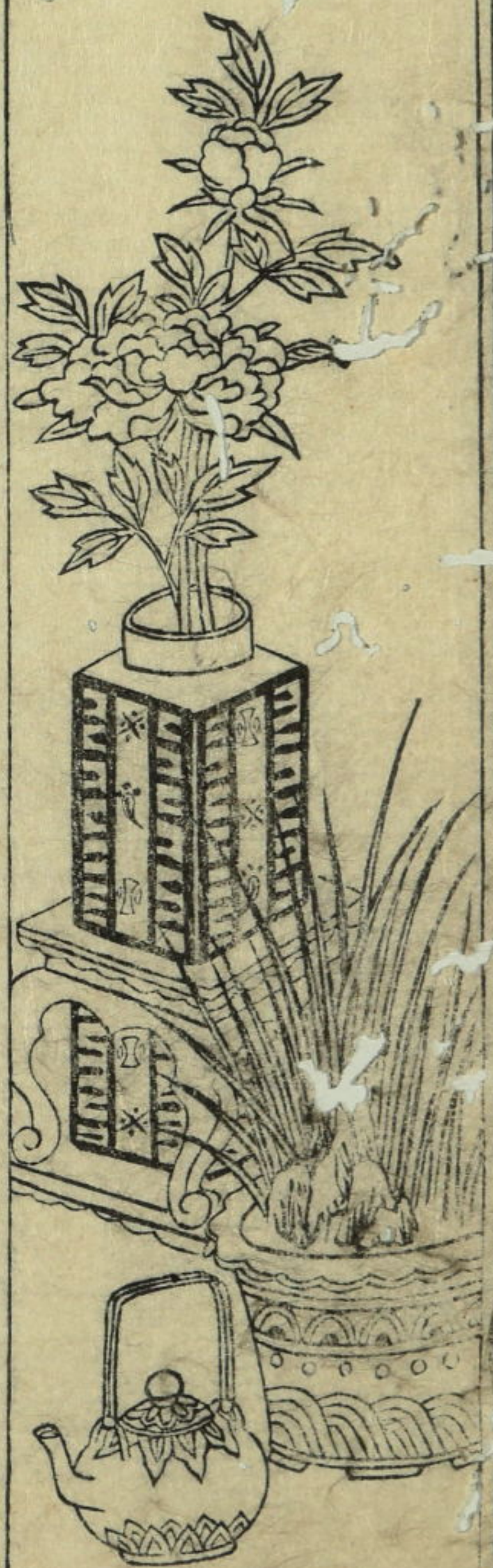


# 續新齋夜語



續新齋夜語序

梅龍主人若及之執也

留著書紀行世第在

更勤身去之心盡漏以

昔清宵冬一日出賣集

來禱上之朱主人治籍

之若身喚而治聖之言

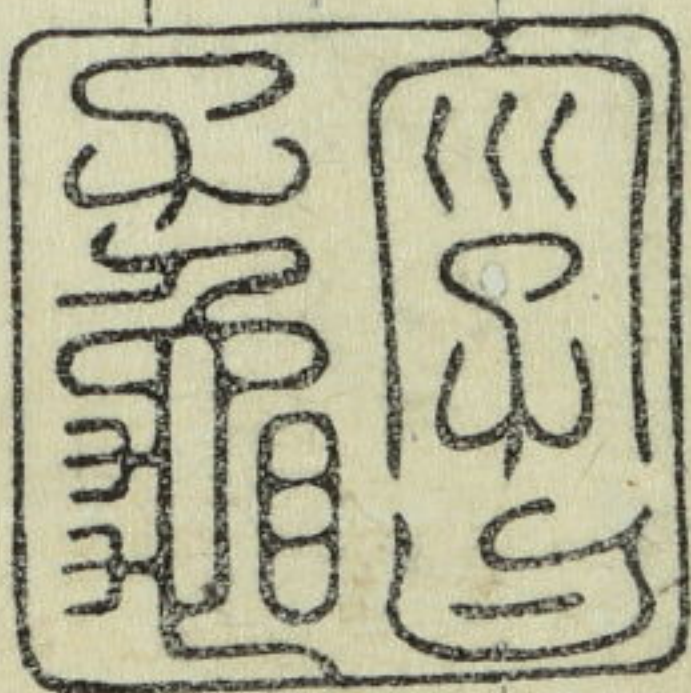
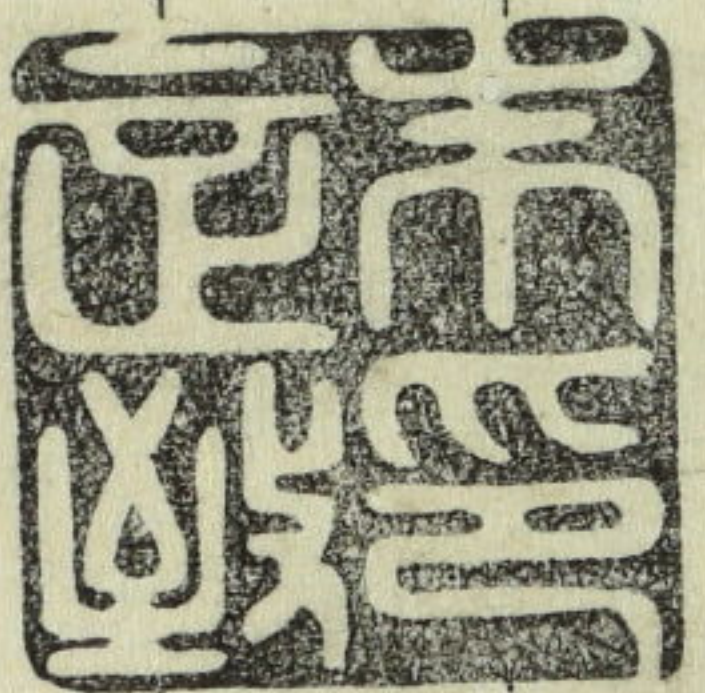
人豈見不棄本為事業  
必有請命即拜卷乳中  
昔報要錄於老鶴玄筆  
隨念到繁結如畫其逸  
柳函懷如此畫共因桂林  
一枝了可擊節有  
觀心之難如枝後事

遂以象序子子之海不  
數非其人亦許一曰先乞  
家毛序可編家美已  
遊冬當在於世未嘗不  
豫決子以也不及為之  
或或彩子勿堪打是潛  
寫出漢柳一級能洞著

續新齋夜語序  
云尔

安水淺成之友

朱正致淺



續新齋夜語序

蓋聞昔在王者立裨官記閭巷風俗細碎之言以助政教焉所以小說不可不存也方今國家黜朗之化浹於海內人之温飽安佚樂其業然昇平踰百

年之久稍失淳實之風淳靡成  
俗講張為習姦偽攬秘無所不  
至固勢之所使然矣梅臚先  
生之於此篇有慨然所感而起  
也務望事情必歸忠誠其用  
心深厚可謂閭里之善教也

先生世仕

朝為子璧之士性溫厚种澹  
絕不為貴介容素有王長史  
癖頗曉茗理久善和歌出文  
入武旁綜衆藝其寸洵不可  
測也已世傳羅氏為水滸傳

續新齋  
壞人之心術其子孫三世皆  
啞豈可不慎哉  
戊戌季夏松石道人書于三  
畏齋中

續新齋夜語 東都梅隴館主人 著

條目

卷之一

一 蕉堅道人細川右典厩と貶了

附 妓女但馬籠鳥江放ち結

二 浪華の五子父江命と贖しん事江新

三 卷之二

三 賣茶翁再坐奠い許小語こ

四 乞巧乃婆梅若太夫い以詰つ

五 吉野の道世者依川田い歌うた評ひら

一 卷之三

六 伏水ふし乃妓女号竹遊女たけあそびの趣おもむ以知し

附 西翁男女對覽い乃可い否ふ論ろん

七 医官某い叙相しよ并な七しち百ひゃくの支象し以い難がた以い入い

卷之四

八 奥州白河山中地仙墳おくしゅうの來由きよ

九 三光院殿再嵯峨さんこう乃草庐くさろと訪ま

卷之五

十 一品法親王寺門いっぴん以道災い以知し

十一 農夫の信義公廳いと感か

其二

條目終

十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

續新齋夜語卷之乙

一 蕉堅道人細川右典廐と賤す

曆應年中洛西小天龍寺建立ありて夢窓国師住山  
一玉以。大樹連枝の面々麾下の諸侯に至り迄踵とあり  
糸請し。或ハ僧堂之法と聽或ハ文室に禅と糸する事絶  
ざる。一が國師示寂の後ハ法乃をも之風流てなり。此の心  
地。今山中に袖子の放条止静の性来たり。此の心  
川右馬頭觀之ハ篤實乃君たり。猶政事ハ餘暇に  
禅味と甘んじ。蕉堅道人と師として。向上の一路と窺ひ









賣新荷



經緯



副て通らんと。追より思ひ出せし送、何れをてらむ。  
あそびしるも世の人乃口石、祥なりよまらるる。茶店の  
わりの勇、語ては興ハ世所の乳守に但馬とつる遊女の人  
は幸やして。今伴りぬゆるを、何れと云ふに、誠は前世乃昔  
因のふにあらる。一と答に。あや一云た。又社ハ有へる。先  
三世了達の方、うらひハ知へる。世女も、現世の心、をて格別  
うる人、その若果、れ觀面よ、あつるそ、何れ。夫とつるも、あ  
は但馬西国、節の豪富乃人、と客して、折々通りを、うらよ。彼  
人國へ行て、又来つめる家、累又黄鳥と、心唐土の賞、うら  
と。珍らした美しき、多一番りて、秀て贈らぬ。但る悦びて

一日二日座、あるまき、詠へば、何れも、いん籠の戸と、開て飛せ  
や。ぬ。と、世多日、彼客来り、は、射と、そ大よ、登るま、い、う、あ、ま  
りて、迹し、多も、推き、の、志つ、ま、あ、ま、印、は、但る、お、あ、ひ、く  
は、は、い、ぬ、ひ、び、や、は、後、中、の、時、ハ、英、友、あ、は、る、鳥、ま、は、目、離、せ  
び、ら、あ、ら、う、日、と、思、き、を、する、ま、鳥、の、心、を、成、て、あ、ひ、ゆ、ら、ふ。  
舟、う、ら、や、美、あ、あ、つ、た、あ、ひ、て、を、ね、も、と、の、心、ハ、を、を、ね、を、ね  
ん、ら、い、あ、山、と、廣、を、翔、り、あ、ら、う、ん、事、と、あ、ら、う、づ、い、我、身、の、こ  
も、ん、ら、い、え、ま、ま、と、鏡、羅、よ、あ、つ、つ、是、琴、瑟、と、弄、び、あ、ら、う、て、い、い  
斗、樂、一、こ、ん、ま、あ、ら、う、も、我、身、と、成、る、其、し、き、世、波、ま、か  
ら、と、は、身、と、して、は、鳥、と、龍、よ、入、ら、ぬ、あ、ら、う、ん、事、あ、ら、う、と、ハ、情、か



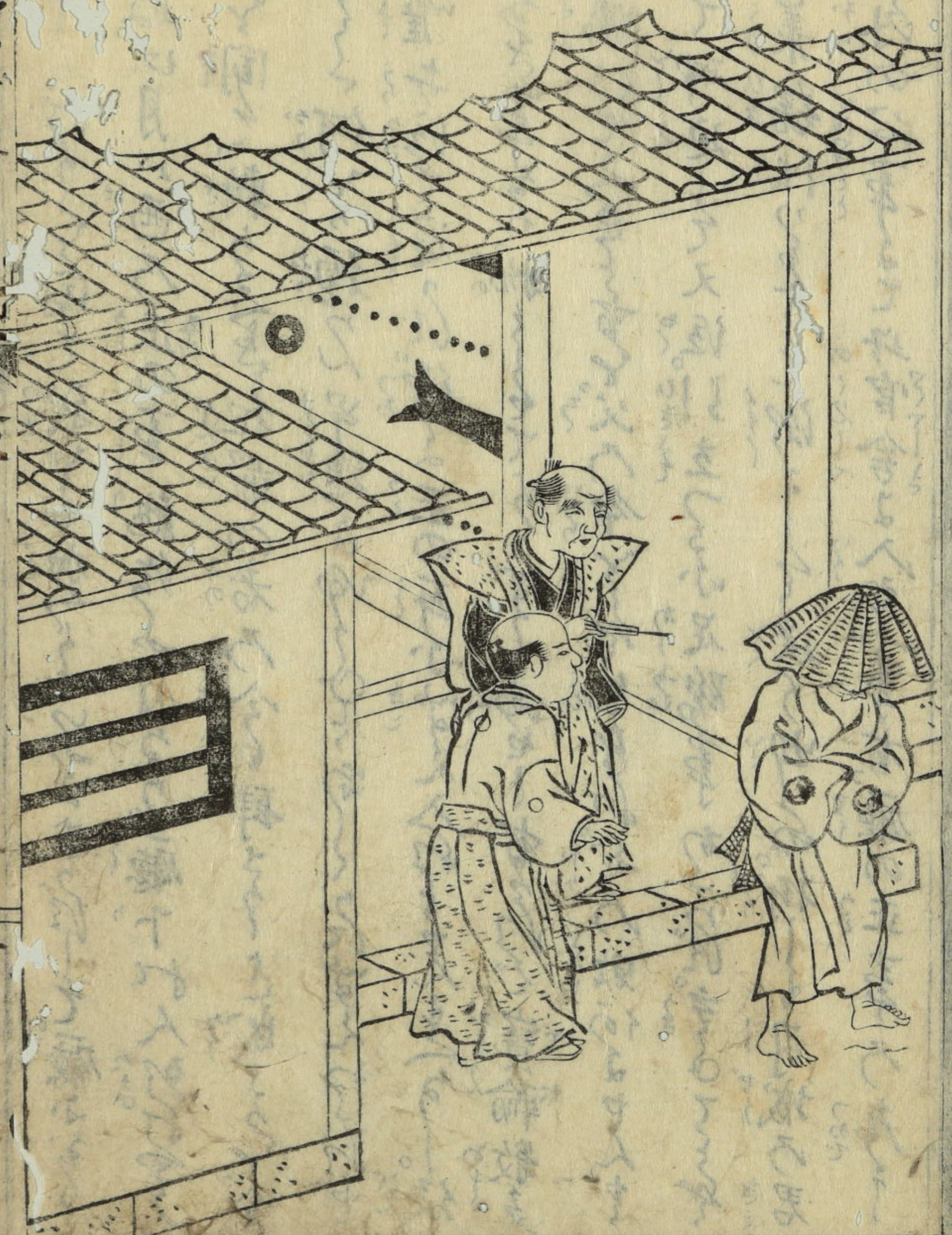
注来一。米穀雜只と運送して業とす。若多一船は米  
 て行者と沖船頭と云。家は居て指麾する者と居船頭と云。  
 遠くぬ世の事々よ。堀江橋町は年頃住する太郎兵と云  
 のの彼居船頭なり。是は属する沖船頭ハ新七と云。一年  
 新七は課て出羽の秋田一行て。米穀許多積て運賃取て  
 浪花は帰るとする。暴風波瀾と奉て舟と大洋は漂は  
 一の檣と折撤と碎て辛うして助るものと云。新七思ふ  
 こぶの難船十死と出て一生はゆき。程孝は米多く残  
 船も補ふかと費多うと云。米皆海底は没する程は

謀が。密に金銀は換へ船と水船うて浪花はゆき  
 夜は入太郎兵の許は至り罪懼し。若多かく身ひぬ。金  
 許多取出て。是納め運と云。太郎兵僻く事する。ハ知れ  
 固揚震。賢いあ。暮夜知るのの。ハ知れ。ハ知れ。  
 人よ。海すか。と。深く。人。水船。賣て。若  
 他。の。公法。は。事。米。主。怪。と。事。あ。て。  
 探。索。て。浪。華。の。廳。所。小。訴。出。り。は。  
 新七の。居。船。頭。め。と。く。  
 太郎兵。牢。獄。と。ま。ぬ。太郎兵。は。五。人。也。婿。の。名。ハ。伊。知。年  
 十六。二。女。若。幾。十。四。之。女。也。久。分。次。幼。弟。也。分。は。長。太郎

とて養ひ子有。渠等母もた。その坊長は預けらひて。新七と  
 尋させ給へ。二年より及らひ未出来。此今代はせんとて  
 太師兵の罪の端究。その高札は誌して十月廿三日木  
 津川口は肆して。サウ斬らるべきは定ぬ。彼妻子も久く  
 預けらひて。世間のもの知るべき。その風説の噂あり  
 きた。聖王は肆者は成よ。斬るべきは云々。女百より之聞  
 て。伊知は殊文食と名。夜よ入て。控眠る事。わつす。長く  
 嘆息して。獨語す。母も三人の子も。熟睡し。り。弟幾や。せ  
 と。阿姉女や。よ。つ事も悲し。て。睡ら。す。と。云。姉。す。て。さ。ら  
 物言んと。身えよ。よ。と。父の心。常。又。実。く。て。神。仏。も。も。よ。く

つふふふ。今から罪犯。一玉あり。偏。我。ホ。も。世。の。め。せ  
 ふ。との。惑。り。ふ。ふ。ふ。で。祭。り。合。と。指。く。父。の。身。代。り。す  
 さん。と。云。事。と。云。又。預。け。な。ん。に。い。ふ。長。太。ハ。世。に。ひ。み。こ  
 男。あ。る。の。と。云。を。垂。て。父。母。乃。と。云。と。云。せ。ん。や。う。く。秘。あ。い  
 い。ひ。か。し。残。り。の。我。は。後。が。い。ん。と。云。と。云。二。人。す。づ。く。由。て  
 燈。を。挑。て。書。け。る。や。う。の。親。の。代。り。よ。ふ。お。め。人。と。云。や。う。く。長。太  
 帝。ハ。義。理。め。ら。中。の。あ。ら。り。残。り。人。と。父。の。代。り。よ。命。を。取。取  
 下。さ。ら。り。有。難。く。ね。ま。つ。る。せ。ぬ。霜。月。廿。三。日。と。云。て。之。を。相  
 願。所。一。紙。く。き。道。と。い。ひ。の。長。太。と。引。起。て。案。内。と。云  
 して。い。く。寒。き。夜。既。よ。白。く。り。長。太。格。し。と。尋。て。去。り





ぬは月ハ西乃正の事執行ふ所なり。廳下れ人給ひ  
 与聞之。斬るべき犯罪の者乃今日驛さうと成て今  
 へ何と預らん早速にゆいひは向くるはずえり  
 唯亦返りて退るは許さず正の耳ふす入れとせん是を  
 さま車さる物とせりてくす。ゆせとあるはど寶輪教多  
 賜して之をせんと父乃命とせりはなれお乃財何やせんを  
 て押返して又返り立つる不足踏事あらはれきよにて  
 兼若法り免るは送る出ぬ折しも司城乃君  
 外の公事さて此官舎に入の事有廳の正事乃序

今百人を預る預るもゆりつ連とて。此振物有り。こ  
 した聞し臣で誠不便の事明日日出て此の真  
 優厚厚弘明をさるとて。翌日司城の君東に正も西  
 の官舎を集ひし町の長お人の若と連て出る。庭上るは  
 荊鞭鐵杖桎梏枷鎖とさう並斬り別折らん等  
 等と責殺して儲るはついで逢らん事おさう。さ  
 ちをたすも。再會とあつて。然のくすも。えは  
 等と責殺して儲るはついで逢らん事おさう。さ  
 ちをたすも。再會とあつて。然のくすも。えは  
 等と責殺して儲るはついで逢らん事おさう。さ

書并  
 二二二

道に於ては、母を怨む者あり。是れ、死母と残せり。いづれ  
其の命が失ふと申る子よ。いづれ、死のそけいし。母を  
恨むる母よ。母よ。志も死して。母を恨むる。母よ。母よ。  
并ひ者。母を恨むる。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
津凝り。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
少。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
其母を。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
進。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
の。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。

んとて。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
前。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
う。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
一。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
又。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
大。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
罪。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
等。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。  
後。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。

先。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。母よ。

前より引遇する親に抱きかかると  
 懐く甲斐なくして歡喜の涙沙土に濺とすの東西の廳  
 伯耆の大小乃官人見ると聞とゆ者皆中よ沾るる事  
 事か。是志しかり清時の御惠豈庸人の言致し辱く  
 せんや彼五人の誠と勇の器なり。聖人の語と聞ふといて  
 道は天理を周し聖人乃心よけり。好學は君子にとい  
 て感慨するは有らざる

續新齋夜語卷之一終

